

戦後五十年を迎えて

宮沢良子

今年で戦後五十年を迎えた日本。テレビでもあちこちの番組でその事を大きく放送していた。偶然に見た番組で、アメリカの人が広島・長崎の原爆投下についてこう答えていた。「アメリカは日本を許したのに、日本は戦後五十年たった今でもその事を許せないというのはおかしい」

この言葉の意味が正しいのかどうかは、今の私には分からない。私が思うことは勝ち負けが決まった時が「終戦」ではなくお互いを許し合えた時が本当の終戦ということだ。日本とアメリカは残念ながらもまだそれができていない。私達も小学校の低

学年から、戦争の恐ろしさや悲惨さをずっと習ってきてある程度の知識は持っている。しかし、実際に被爆した人たちの苦しみや無念さは半分も分かっていないだろう。耳で聞いたそれだけで、「ああ、そうか」と同情するだけだ。そんな悲しみを分け合う様な事よりこれからの世界が平和である事の方が大切だと私は考えている。人が生きていく中で争いは必要な事なのかもしれない。だからといって命を奪うまで争わなくてはならないとはなんと情けない事だろうか。実際に被爆した人が書いた本を読んでいて、とても心に残る一文を見つけた。

「私は原爆をうらんでいません」

普通なら恨んでもやりきれない悔しい気持ちになるだろう。しかし、この一文は違う。その底深くに攻撃的で、しかもこの上なく寂しい気持ちを秘めている。死んだ人は帰ってはこないのだからという諦めの中の表れた文では決してないのだ。物事に悲観的になるのではなく、これからどうすれば良いのかそういう事を考えさせられた。何より大切なことは、過去から目をそらさず直視し、それをちゃんと伝えていくことだ。今年に入っただけで、家族の中で唯一戦争を体験し、知っていた祖父がなくなってしまう。こんな戦争の事について考える機会があるならばもっとその事について話してもらっておけば良かったと今にな